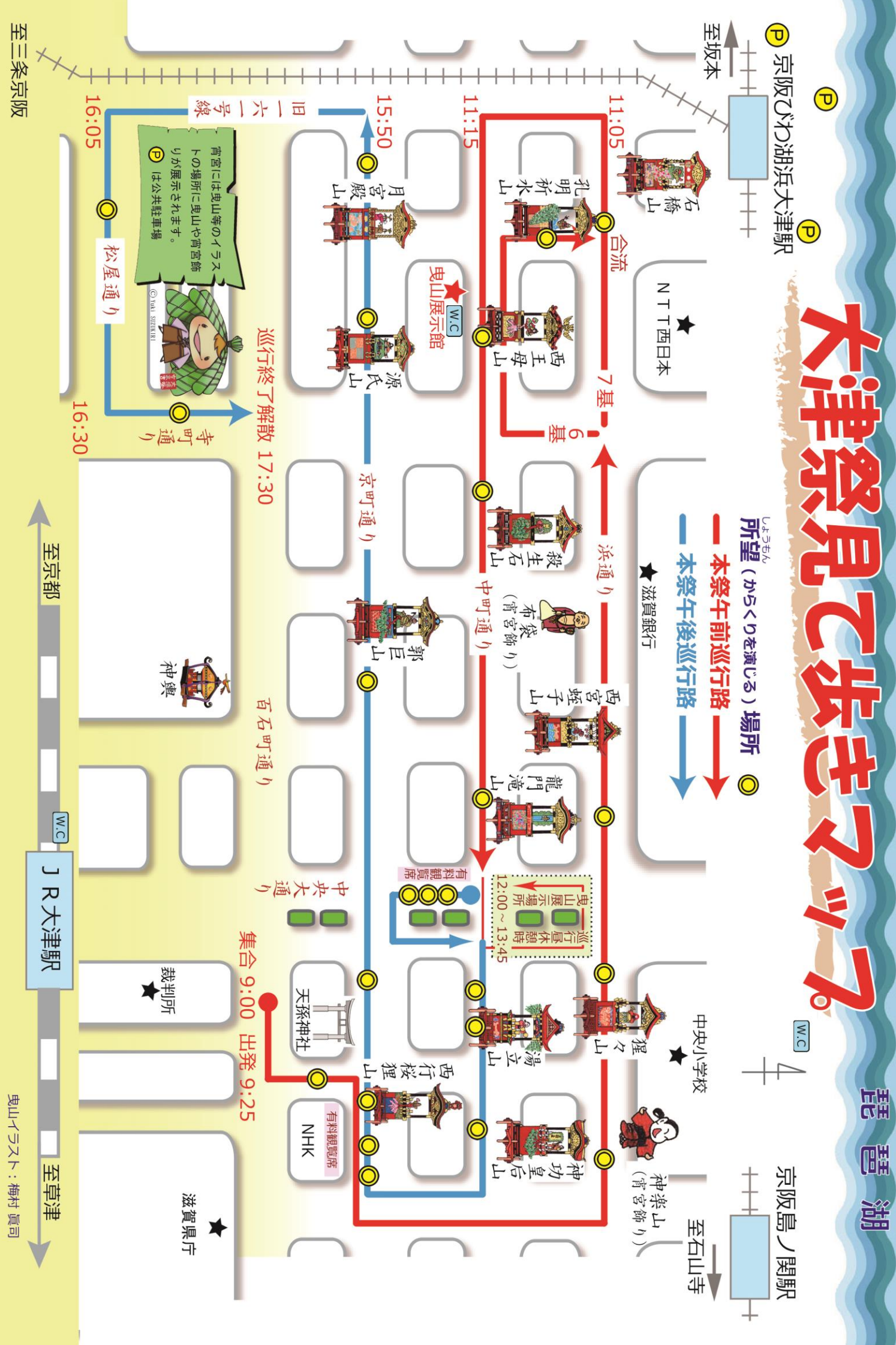


國指定重要無形民俗文化財



大津祭
Instagram

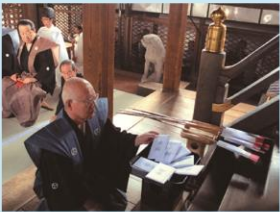
大津祭見て歩きツアー



四百年の歴史と伝統を持つ大津祭は、湖国三大祭の一つで、国指定重要無形民俗文化財に指定されています。曳山巡行は絢爛豪華な13基の曳山が、優雅なお囃子を奏でながら、からくり人形を操り、まちなかを巡行することで知られています。大津祭の曳山の起源は、現存する古文書「四宮祭礼牽山永代記」「牽山由来覚書」などから、まず寛永12年（1635）に西行桜狸山が、その後、安永5年（1776）までの約140年間に14基の曳山が創建されたことがわかっています。祭礼は、かつて毎年10月10日が本祭でしたが、現在は毎年10月の「スポーツの日」の前日が本祭、その前日が宵宮となっています。

鬨取り式

毎年九月十六日には天孫神社において鬨取り式が行われます。鬨取らずで毎年先頭を行く西行桜狸山を除く十二基が、最初に舞殿で本鬨を引く順番を決めるための座鬨を前年の巡行順に引き、その後本殿に移動して本鬨を引き巡行順が決まります。鬨取り式の前には神輿祓い神事が行われ、この日から大津祭の祭礼期間となり、夜にはお囃子の稽古も始まります。



宵宮

宵宮は本祭の前日に行われる行事です。午後から各山町の周辺を曳き回す宵宮曳きが行われたあと、曳山は町内に留め置かれて大吊り提灯などの飾り付けが施され、夕刻から曳山の上でお囃子が奏でられます。また、からくり人形や本祭用の懸装品（幕や銚金物）が公開され、間近で観ることができ、町中は夜の九時過ぎまで多くの人で賑わいます。



所望

からくりを演じることを所望といい、地元では「しょうもん」と発音します。大津祭のからくりは、中部地方の仕掛けや技を見せることを中心にしたものとは違い、能楽や中国の故事などの、物語の一節を切り取って見せるという、他にはない特徴があります。巡行中約25ヶ所で所望が行われますが、その場所には先を赤く染めた御幣が掲げられ、見物に訪れた人にもすぐわかるようになっています。



山建て

本祭の一週間前の日曜日に各山町において一斉に山建てが行われます。作業は早朝から始まり、組み立ては町内が契約した山方と呼ばれる人たちの手により、釘を使わず縄と栓のみで約半日で組み上げられます。午後からは組み上がりを確認するための、曳初め（ひきぞめ）と称する試し曳きが行われ、一般の人が曳き手として参加することもできます。



本祭

天孫神社の南側に集合した曳山は、九時二十五分に鬨取らずの西行桜狸山を先頭に巡行を開始します。まず天孫神社の正面鳥居前で止まり、鬨改めのあと最初の所望が奉納されます。午前中はこうした神事があるため囃子方は紋付きを着用しますが、昼休憩をはさんだ午後からは着流しと呼ばれる色とりどりの襦袢半纏姿となり、一段と華やかになります。巡行は夕方の五時半まで市内の氏子中を回り、町は終日お祭り一色の賑わいに包まれます。



厄除け粽

蘇民将来伝説に因む京都祇園祭の風習を取り入れたもので、この粽を門口に飾っておくと厄がその家に入ってこないとされています。曳山の上からは囃子方がそれぞれ自らが購入した厄除け粽を盛大に撒き、御利益を授かろうと、それを受けるのも大津祭の楽しみのひとつとなっています。（※中に餅は入っていません）



西行桜狸山

猩々山

西王母山

西宮蛭子山

殺生石山

湯立山

郭巨山

孔明祈水山



寛永十二年（一六三五）

寛永十四年（一六三七）

明暦二年（一六五八）

万治元年（一六五八）

寛文二年（一六六二）以前

年未詳（寛文中湯立山）

元禄六年（一六九三）

元禄七年（一六九四）

塩売治兵衛が狸面を被って踊った事が発祥となった大津祭最初の曳山。明暦二年に西行法師が桜の精と問答を交わすカラクリを採り入れ、西行桜狸山となった。曳山の祖となった狸は屋上に載せられ、祭の先導をする守護となった。このため、この山はくじを取らずに毎年巡行の先頭を行く。所望は、古木から桜の精が現われ西行法師と問答をする。

謡曲の「東方朔」から取材したもの。むかし崑崙山に住む西王母が天女とともに舞い降り、帝に桃の実を捧げ、長寿を賀した。この桃は三千年に一度花が咲き、一個しか実らない貴い桃であった。ここから俗に「桃山」と呼ばれる。所望は、桃が二つに割れ、その中から童子が現れて所作をする。これは桃太郎説話が加味されたものとも云われる。

能楽の「殺生石」から取材したもの。鳥羽院に寵愛された玉藻前は、実は金毛九尾の狐で帝の生命を奪おうとしていたのを安部泰親に見破られ、東国に逃れ、那須の殺生石となって旅人を悩ましていたが、玄翁和尚の法力によって成仏したという。所望は玄翁和尚の法力によって石が二つに割れ、女官姿の玉藻前が現れ、その顔が狐に変る。

天孫神社の湯立ての神事はこの山から捧げるとい、曳山は天孫神社を型どり、周りはその廻廊を真似たものである。所望は真似たもので、市殿が世で湯を奉り、飛矢が神楽を奏する。昔からこの湯をかけたものは五穀豊穡、病氣平癒、うと穴を掘ったところ、そこから黄金の釜が出てきたという故事がある。所望は、郭巨が釜で土を掘ると黄金の釜が出てくる。

石橋山

龍門滝山

源氏山

神功皇后山

月宮殿山

神楽山

布袋ねりもの

神輿



宝永二年（一七〇五）

享保二年（一七一七）

享保三年（一七一八）

寛延二年（一七四九）

安永五年（一七七六）

寛永十四年（一六三三）

元禄六年（一六九三）

寛政九年（一七九七）

謡曲の「石橋」に取材したもので、大江定基入道寂照が宋の国に渡り、清涼山にある文殊菩薩の浄土に続く険しい石の橋を渡ろうとしたとき、文殊菩薩の使いである獅子が岩の中から現われて、牡丹の花に舞い戯れるのを見たというもの。所望は、岩が開き、僧寂照の前に唐獅子が歩み出てきて牡丹の花に戯れ遊んだあと、岩の中に戻ってゆく。

黄河の上流の龍門山の滝。魚は登ることができないが、もし登る魚があれば、昇天して龍になるという故事に因んでいる。登竜門という語はここから出たもの。所望は龍門の滝を鯉が躍り上がる所を見せる。鯉の滝登りは曳山のからくりとして、他に例がなく、たいへん貴重なもの。見送りはベルギーのタペストリーで重要な文化財に指定されている。

神功皇后が戦前に先立ち、鮎を釣り戦勝を占ったときの曳山の中で、唯一大津祭に伝説に因む。神功皇后は当時懷妊されていたが、戦さが終つて後、応神天皇を無事出産されたことから「安産の山」として信仰されている。所望は、皇后が岩に弓で字を書く所作をする。岩に次々と文字が現われてくるからくりで、文字書きからくりとしては漸新な機構とされている。

謡曲の「喜多流月宮殿」から取材したもの。唐の皇帝が長生殿で新年を祝う節会を催され、世を寿がれたというもの。所望は、鶴と亀の冠をつけた男女の舞人が、皇帝の前で舞を舞う。そこから俗に鶴亀山とも呼ばれる。ベルギー製で重要な文化財の見送り幕を所有するが、現在は平成十一年十月に復元新調されたものを使用している。

寛政九年の伊勢参宮名所図会に「御輿祓いの日に百石町より紙の御輿を出す」とある。この頃の神輿は、フスマのような紙貼りの神輿であった。弘化二年に神輿の新調があったという記録があり、現在の神輿の鳳凰や瑠璃は、この時のものである。昭和三十年代までは、天孫神社の神輿とともに渡っており、国指定を機に渡御が復活した。